

協議主題

幼児教育と小学校教育の接続による教育の充実について

1 主題について

本園は100年以上の歴史の中で、「愛し愛されるこども」を育て続けてきた。建学の精神である、キリスト教保育に基づき、確かな自分（自立）・個から集団へ（共生）・大いなるものへの感謝、この3つの理念を大切にしている。この理念は「幼保小の架け橋プログラム」が目指す子供の姿と深く重なると思う。その背景には、「自立と自律と共生を育む」ことの理念を小学校へとつなぐ願いがある。

本園では、これまで近隣の小学校が徒歩15～20分と少し距離があったり、進学先となる小学校が複数であったりすることから、小学校との交流が難しく、幼保小の接続についてはほとんど行うことができなかった。そのため、子供の活動を通して連携・協働を図っていくことをスタートとし、今後互いの教育の理解を深めていながら継続的に幼保小の接続について計画して進めていきたい。

2 研究の視点

- (1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼小の連携・協働による架け橋期の教育の充実を図る。
- (2) 幼小が互いに歩み寄り、双方の教育に理解を深めることで、本園における初めての架け橋期カリキュラムの作成・実施を進める。

3 実践事例

- (1) 幼小の連携・協働による交流活動の充実を通じた架け橋期の教育の質の向上

① 主体性や社会性を育む「なかよしタイム」の実施【取組1】

本園では、小学校への就学を見据え、幼児期で主体性や社会性を育むために、「10の姿」を考慮しながら、「なかよしタイム」として、対話の時間を設けている。この活動は、年長児を中心に行っており、取組を継続することで少しずつ思いや考えを表現したり、友達の話を聞けるようになってきた。以下に示すのは、年長児の話合いの様子と子供の変容である。

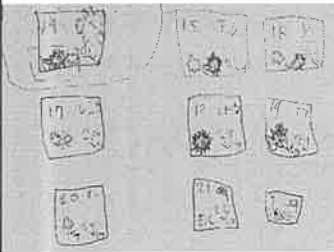


	事例①（全員）	事例②（少人数）	事例③（10人×2グループ）
テーマ	ドッジボールと鬼ごっこどちらの遊びにしたいかを決める。	同じグループの友達と、どこで遊ぶかを決める。	動物の名前のグループ名（ぞうグループ等）を決めるにあたり、名前の候補を10個決める。
子供の様子、変容	- 自分がやりたい遊びを一方的に主張する。 - 友達の意見を聞かずに発言する。 - 集団での話合いに長時間参加することが難しい。	- 少人数であることで、自分の意見が言いやすくなった。 - 考えの折り合いをつけることが難しい。 - 友達の意見を聞けるようになった。	1人1つの考えを出せばよいことに気付く。 - 友達の発言を受けて、自分の考えを広げる。 - グループによって、話合いの進め方に違いが見られる。

「なかよしタイム」を繰り返すことで、子供に変化が見られた。このように、話合いの場における「学び合い」の経験は、小学校での学習や学級活動に必要な「対話を通して学ぶ力」の基盤となると考えられる。

② 子供の主体性を育む幼児（年長児）と児童（５年生）の交流活動【取組２】

前述の「なかよしタイム」において、ドイツから体験入園をしていた友達が、帰国することになった話をした。子供は別れを惜しみながらも、ドイツでは９月から小学校に入学するという話に興味をもった。そして、「小学校ってどんなところだろう。行ってみたいな」という声が挙がり、小学校への意識が高まった。そこで、小学校との交流活動を行うことを子供に投げかけた。小学校との交流を始めるにあたり、教師だけでなく、子供が必要感をもって取り組むことが何より大切だと考え、以下のように実践した。また、これらの活動を通して、幼児教育の充実がどのように図られたかについて「10の姿」から検討を行った。

交流の流れ	経過と子供の様子	見られた「10の姿」
① 小学校への興味を広げよう	・歩いて行ける近くの小学校はどこかを挙げながら、行ってもよいか確認が必要なことに気付く。 ・どのように連絡を取ればよいか意見を出し合い、電話をしてみるようになったが、番号が分からない。 →近くの小学校は２つ。その小学校の電話番号を家で調べてくることになった。	(3) 協同性 (9) 言葉による伝え合い
② 電話をかけてみよう 	・誰が何をどのように聞けばよいかなど、１つ１つ話し合いながら解決した。これまでなかなか自分の意見を言えずにいた子供が手を挙げるようになり、主体的に活動する姿が見られるようになった。誰が電話するかの話合いでは、いろいろと調べてくれているＡちゃんにお願いすることになった。 ・みんなが静かに見守る中、Ａちゃんはハキハキと受け答えをしていた。	(5) 社会生活との関わり (9) 言葉による伝え合い (10) 豊かな感性と表現
③ 手紙で自己紹介 ④ 小学校へ行くために 	・小学校に行ってもよい日を確認する手紙を書くことになった。 ・校長先生から直筆の手紙が届き、行く日が決定した。小学校までの道のりを調べてくれた子供がいたが、その中で「地図は合っているかな」「学校まではどのくらいの時間がかかるのかな」「天気はどうか」と気になることが出てきた。調べた地図を基に実際に行って確かめたり、天気予報を調べたりした。 ・子供同士で地図やカレンダー、天気予報を見て、話し合う姿があった。	(6) 思考力の芽生え (9) 言葉による伝え合い (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
⑤ 雨の日はどうするか 	・当日が雨予報であることを知り、カッパを自分で着る練習をした。小学校にカッパを掛ける所があるのかなどを話し合い、実際に確かめた。 ・持ち物が他にもあることに気付く、リュックサックが必要なことや持っていない場合はどうするかなど、子供同士で必要なことを話し合うようになった。	(6) 思考力の芽生え (9) 言葉による伝え合い
⑥ 小学校を訪問しよう	・事前に持ち物の確認等を子供が主体で行った。道のりを確認し、一人一人が期待をもち、意欲的に出発することができた。	(2) 自立心

交流会を行うにあたっては、園と小学校の教員で、互いが大切にしたいことについて共通理解の場を設けた。

幼稚園が大切にしたいこと	小学校が大切にしたいこと
・園児が小学生にお世話をしてもらうだけでなく、園児の育ちや学びの成果を発揮できる場を設けたい。	・子供は、園児を楽しませようと様々な活動の場を考えている。子供の試行錯誤を生み出すために、子供同士の自然な関わりを大切にしたい。

その後、5年生の児童にお返しをしたいという話になり、児童が園に遊びに来ることになった。小学校でももらったことを思い出しながら自分たちがしてあげたいことを話し合った。

交流の流れ	経過と子供の様子	見られた「10の姿」
⑦ 5年生が来園する準備をしよう 	・話し合いでは、園の案内や運動会をすることになったが、案内の段取りや運動会の競技内容等、互いに譲れない場面があった。そのような中、「なかよしタイム」での経験を生かし、みんなの考えを書き出して整理しながら、必要なことを決めることができた。 ・児童と同じようにプログラムやプレゼントが必要だと考え、協力して準備を進めた。	(1) 健康な心と体 (5) 社会生活との関わり (9) 言葉による伝え合い
⑧ 児童が来園する	・2日に分けて、2クラスの児童が園に訪問した。両日とも2グループに分かれて、ゲームと園内の案内を入れ替えて進めた。その後は児童が考えた遊びを選び、交流を楽しんだ。	

「なかよしタイム」での話し合いをきっかけに、子供が小学校への興味をもったことを捉え、交流活動に繋いだことで、子供が主体的に活動に取り組むことができた。この取組を通して、一人一人の成長の姿は異なるものの、子供たちには「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示されるような姿が様々な場面で見ることができた。

また、交流活動を通して、小学校教員から、「5歳児になると、自分でできることがたくさんある。子供の育ちについて知ることができた」という、幼児期の育ちについて理解を示す声を聞くことができた。

(2) 幼小が互いに歩み寄り、双方の教育に理解を深める場の設定

① 互いの現状を知り、子供の育ちや学びの繋がりを考えるための教職員の交流【取組3】

架け橋カリキュラムの作成にあたっては、まず、園と小学校が互いの教育で大切にしていることを知ることが大切だと考えた。

そこで、相互理解を深めるために、小学校と話し合いの場を設けた。互いに伝えたことと、そこから感じたことは、以下の表に示す。



	伝えたこと	話合い後の感想・意見
園	・子供が、遊びの中で何を学んでいるのかを見取り、主体性をもって活動していけるように支援している。 ・日々の活動の繰り返しの中で、子供は見通しをもって生活している。その中で子供がやってみたいと思うことを大切にしている。 ・小学校への就学を見据えた「なかよしタイム」を行っている。ここで育まれた子供の育ちを小学校につないでいきたい。 ・近隣の4園での繋がりを検討している。まず、共通の歌を決めた。	《小学校より》 ・幼児期に育まれたものを、小学校で生かしていけるとよい。 ・4つの園で決めた共通の歌（「手のひらを太陽に」・「勇気100%」）は、道徳の教科書に載っている。互いの学習内容を伝え合うことで、学びがつながることが分かった。今後は、互いに見学することも視野に入れていきたい。
小学校	・入学後の1年生は、友達に優しく接したり気遣ったりする様子が見られる。学校のルールを守って生活している。給食の準備を、6年生のようにできていて、園での育ちを感じる。 ・様々な園から入学しているが、園ごとの育ちの違いは感じられない。	《園として考えたこと》 ・小学校では、4園の子供の育ちにそれほどの違いはないと伝えられたが、今後も4つの園の交流を継続していくことで、スムーズな就学につなげたい。

これまで、一度も教職員同士の交流の場を設けたことがなかったが、園からのアプローチに、小学校が応じてくださったことで、情報交換ができた。互いの教育で大切にしていることを知ること、さらに実のある交流にしていこうという共通理解につながった。

4 実践より明らかになったこと

- ・「なかよしタイム」の話題から、子供が興味をもったことを捉えて交流活動につないだことは、子供の主体性を軸に、様々な学びに繋がった。また、子供同士の交流の中で生まれた育ちを、園だけでなく小学校教員も感じることができた。
- ・架け橋カリキュラム作成の第一歩として、教職員同士が互いの思いを伝える交流の場をもったことで、子供の育ちを理解し合うことができた。

5 今後の課題

- ・子供に育まれた力を、小学校での学びに無理なく繋いでいくためには、改めて園と学校との連携が必要だと気付かされた。今後は互いの職員が園と学校を行き来しながら、それぞれの育ちを理解し、現状を話し合ったり、相談したりしながら子供の姿を基に学びの繋がりを考え、スムーズな接続ができるような歩み寄りが必要である。
- ・本園は、小学校との交流を始めたばかりである。進学先が多岐にわたり、交流が難しい地区でも円滑な接続に向けて少しずつ取り組む必要がある。小学校との連携・協働について、進学先が同じ他園と情報交換するなど、横の繋がりも大事にしていくことが必要である。

協議主題

幼児教育と小学校教育の接続による教育の充実について

1 主題について

近年、子供を取り巻く環境や家庭・地域社会の変化に伴い、幼児教育から小学校教育への円滑な接続（架け橋期教育）の重要性が高まっている。特に、幼児期の学びを小学校での学びへつなげる教育の充実が求められている。

滑川市では、令和6年度に「滑川市架け橋期コーディネーター」の助言を基に、架け橋期プログラムを作成し、小学校1年生担任と前年度年長児担任を対象に、毎年改善・見直しをしている。また、幼稚園、保育所（園）、認定こども園並びに小学校が互いの保育や教育への理解を深め、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るため、合同研修会を年2回実施している。

本園では、滑川市立西部小学校との子供同士の交流活動を毎年実施している。しかし、保育者と小学校教員が子供の育ちや教育観について意見交換を行う機会は十分とはいえない。また、園での育ちや学びの姿を小学校での学びへ生かしていくことや、就学に向けた保護者への不安に寄り添うこと等に課題があった。

そこで、幼児期に育まれた資質・能力や学びの姿を小学校と共有し、教育の連続性・一貫性を高め、子供の学びを途切れさせることなく安心して次の学びへ進める教育の充実を目指したいと考える。

2 研究の視点

- (1) 架け橋期の教育の充実に向け、幼児教育から小学校教育の学びをどのように繋いでいくか、その際「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を踏まえ、育みたい子供の姿を想定した具体的な手立てについて探る。
- (2) 子供たちの学びを途切れさせないために、教育の連続性・一貫性を踏まえ、「架け橋期カリキュラム」を作成・実施・評価・改善し、具体的に実践していくためにはどのような取組が必要かを探る。

3 実践事例

- (1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用した架け橋期の教育の充実と理解
幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を幼児教育施設と小学校が共通理解し、共通言語として活用していくことが必要である。そこで、次の2つの実践に取り組んだ。

① 学びや育ちを見取り、子供理解に繋ぐ「10の姿シート」の作成と活用【取組1】

子供の育ちや学びを可視化し、保育者と小学校教員が子供の姿を通して理解を深めるため、園独自の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）シート」を作成した。シートには、幼児期の遊びや生活の中で「育まれている面」について記載できるようにした。一人一人の育ちを可視化することで、子供の学びや育ちの姿を共有しやすくした。（別添資料1参照）

（小学校教員の評価）

- ・子供一人一人の実態が把握でき、支援や指導の参考になった。
- ・入学後に子供と過ごしてからシートを見返すと、改めて子供の実態について納得できる点があり、今後の手立てを考える参考になった。
- ・指導要録に加えて、「10の姿シート」を活用することで、子供たちの姿をよりよく理解することができた。
- ・視点別に記入されていて分かりやすかった。ただこれを毎年やっていくと考えると、先生方の負担になるのではないと思う。

（評価を受けて）

- ・子供の姿を共通の視点で捉えるための有効な手立てであることが確認できた。
- ・子供の育ちをより的確に伝えることができるようにシートの改善を図り、継続して活用できるように、内容や活用方法の工夫が必要である。

② 「10の姿」の具体について共通理解を図るための「保育参観シート」【取組2】

保育の様子を小学校の教員が参観する際、遊びを通して子供がどのような学びを得ているかを分かりやすく伝えることが大切である。そこで、小学校教員に幼児期の「10の姿」や小学校教育への繋がりを具体的に捉えてもらうため、参観の視点を明確にした「保育参観シート」を作成した。（別添資料2参照）

小学校教員には、「保育参観シート」を活用し、注目した子供の育ちや、小学校教育との学びの繋がりについて見取ったことや、保育者の支援や環境構成について気付いたことを記入してもらった。保育参観をしながら、このシートに書き込むことで、「10の姿」の視点に基づいて、互いの意見を共有するのに効果的であった。

（小学校教員の評価）

遊びの中で育まれている力が、小学校での生活や各教科の学びに繋がっていることがよく分かった。

「保育参観シート」を使って子供の姿を参観することにより「10の姿」への理解が深まるとともに、幼児教育と小学校教育の学びの繋がりについて共通理解を図ることができた。

（評価を受けて）

保育参観シートを活用したことで、小学校教員が「10の姿」の視点から子供の育ちを捉え、遊びの中で育まれている主体性が小学校の各教科の学びに繋がっていることへの理解を深めることができた。また、幼児期の学びとの連続性について共通理解を図る機会となった。

(2) 円滑な接続を目指した連携・協働の取組

子供の幼児期からの学びを小学校でも途切れさせず、円滑な接続を図るためには、幼児教育施設と小学校が互いの教育内容や子供の姿を理解し、教育の連続性・一貫性を大切にしたい取組を進めることが大切である。そこで、次の4つの取組を行った。

① 実践交流会を通した指導方法の比較・検討【取組3】

年長組の保育と小学校1年生の授業について、それぞれのルールや指導方法を学び合う機会として、「転がしドッジボール」を実践した。年長児、1年生が各々のやり方で「転がしドッジボール」を行い、活動の様子を見合うという内容である。

事前に互いの活動のねらいや指導方法について意見交換を行い、その上で交流会を行った。実践後には子供の様子や保育者・小学校教員の指導の違いについて比較・検討した。

《ルール》

年長児

- ・海の生き物のお面を作成し、それぞれの役になりきる。サメはボールを転がし、海の生き物は逃げる。（サメ VS 海の生き物）
- ・円形コートで行い、ボールに当たってもサメとじゃんけんをして勝つと復活することができる。

1年生

- ・共通のルールを理解し、文字や図で確認しながら活動していた。
- ・初めから外野に二人、ボールに当たると外野に行く。内野に残った人数で勝敗を決める。

視点	幼児（年長児）	児童（1年生）	学びの繋がり（架け橋期）
活動の姿	・遊びそのものを楽しみながら主体的に取り組む。 ↓	・勝敗や役割を意識し、ルールを守りながら活動する。 ↓	・遊びを通して育まれた主体性が、学習への意欲や目的意識に繋がる。 ↓
ルール捉え方	・保育者や子供同士で相談しながらルールを考え、工夫して遊ぶ。	・共通のルールを理解し、守りながら活動する。	・幼児期に育まれた「協同性」「思考力」が、学校生活に必要なルール理解や集団活動に繋がる。
友だちとの関わり	・相手の思いや考えを受け止めながら遊びを進める。	・仲間と協力し、目的をもって活動する。	・幼児期に育まれた「協同性」が、学級での協働的な学びへと繋がる。
育ってほしい姿	・「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」などを遊びの中で育みたい。	・幼児期に育まれた資質・能力を学校生活の中で発揮してほしい。	・「10の姿」を共通の視点として捉えることで、幼児教育と小学校教育の連続性を共有できる。

《実践交流会から捉えたこと》

(小学校教員の評価)

- ・入学前の子供の姿を見ることで、活動のねらいの違いについて知り、1年生への支援や指導を考える参考になった。
- ・相互理解を深める目的で交流活動を継続することは、子供が安心して小学校生活をスタートさせることにつながると感じた。

(評価を受けて)

- ・交流活動の機会を捉えて相互理解を深めることは、子供が安心して小学校生活をスタートするために大切であることを改めて実感した。今後も小学校との連携を深め、子供が期待と安心感をもって就学できるように取り組んでいく必要がある。

② 子供が安心して小学校生活へ移行するための環境構成の見直し【取組4】

子供が安心して小学校生活へ移行できるよう、幼児教育施設と小学校との相互参観を通して得られた気付きや学びを基に、環境構成の見直しを行った。

(環境構成の見直し)

小学校

登校後に過ごすことができるコーナーの設置と、自由時間の内容の見直しを行った。

幼児教育施設

集中して話を聞けるように、机や椅子の配置の工夫、活動の見通しがもてる掲示物等を参考に環境を見直した。

(幼・小の意見交換会より)

園では、掲示物を通して見通しをもつ子供の姿が育まれた。しかし、小学校教員から、園で大切にしている「自分で考えて行動する」「時間を意識して切り替える」等の力が育たないのではという意見があった。様々に試しながら、子供に合った環境を工夫したい。



【年長組の一日の流れ】

③ 幼児期の育ちを生かした小学校の授業づくり【取組5】

小学校教員から学校訪問研修会で行う算数科「なんばんめ」の授業づくりについて相談を受け、学習指導案を見ながら意見交換を行った。その際、園では、子供が位置関係を理解しやすいよう、実際に並ぶ活動や具体物、イラスト等を用いた視覚的・体験的な活動を取り入れていることを伝えた。

実際の授業では、1年生の子供は、アイスクリームを注文するという設定で、「右から○番目のアイスクリームをください」と言ってお店の人にもらう活動をペアで行っていた。子供同士で、楽しみながら「なんばんめ」の学習を進めることができていた。

また、授業後の協議会にも参加し、小学校の学びとして大切にしていることを聞くことができた。入学後、小学校での学習になじめていないと聞いていた子供が、意欲的に学習に取り組む姿が見られ、園での育ちを生かした授業づくりの成果と子供の成長を感じることができた。

(小学校教員の評価)

- ・保育者の視点から授業のアドバイスをいただき、園から小学校へ学びをどのように繋いでいくかを考えることができた。
- ・右、左の伝え方や列での活動をする際には前・後ろが分かりやすいように色帽子をかぶるなど、活用できるアイデアを知ることができた。
- ・子供が幼児期に経験してきたことを学習に生かせるよう、他の場面でも考えるようになった。

(授業を見て)

- ・授業は一方的に教えるというよりも、遊びを通して学ぶことを大切にした内容であり、子供が参加しやすいような工夫がされていた。子供が無理なく楽しみながら授業に参加していた。
- ・4月の意見交換会では、「授業中座っていない子供がいる」と話を聞いた。しかし、その子供が授業に興味をもち、集中して取り組む姿が見られた。

④ 保護者の安心感に繋ぐ「きくぐみ通信」の発行【取組6】

小学校入学への意識が少しずつ芽生えてくる5月下旬に、就学に向けての保護者アンケートを実施したところ、就学に不安が「とてもある」15%、「ある」43%、「少しある」8%という結果だった。この結果を受け、保護者の小学校生活に対する不安を少しでも軽減してもらえるように、職員同士の連携や交流活動における子どもの様子等を「きくぐみ通信」を通して、継続的に発行していくことにした。

例えば、初めて小学校交流に行った際、1年生が遊びに誘ってくれて、楽しい思いをしたこと、子供から「小学生は優しい」という感想が聞かれたこと等を伝えた。また、保護者へは、「お子さんのお話を聞きながら、小学校生活について一緒に期待を膨らませましょう」と呼びかけた。通信を読んだ保護者からは、以下のような感想が寄せられた。



《保護者の声》

- ・「きくぐみ通信」を見ながら、子供から「小学校が楽しかった」と聞き、小学校生活への不安が少しなくなりました。
- ・交流活動の様子を知ることができました。小学校へ行くことが楽しみになってほしいと思います。
- ・今後もこのような交流活動が続くことを楽しみにしています。
- ・小学校へのイメージを少しずつもつことができました。

4 明らかになったこと

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に作成した「10の姿シート」や「保育参観シート」等を活用して子供の育ちを可視化したことは、小学校教員が幼児期に大切にしている子供の育ちについて知り、幼児期に培われた資質・能力や学びについて共通理解を深める上で有効である。
- ・保育者と小学校教員が、施設や活動を参観し合ったり、交流の中で見取った子供の育ちを伝え合ったりしたことは、互いの学習活動を見直すきっかけとなるなど、幼児期の学びを小学校教育へ円滑に接続するための効果的な手立てとなる。
- ・通信を通して小学校との交流や連携の様子を保護者と共有することで、家庭を含めた接続期の支援の在り方について理解を深めることができた。
- ・幼児教育と小学校教育の接続では、環境を単に似せることなく、子供が幼児期に育んだ資質・能力を基盤として、環境の変化（段差）を主体的に乗り越える力を育てることが重要であるということが分かった。また、幼児教育施設での遊びや生活の中で育まれた「学びの芽」を踏まえて授業づくりを行うことで、子供の安心感や学習意欲が高まり、教育の連続性・一貫性の実現に繋がる。

5 今後の課題

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基にした子供の育ちの可視化を継続するとともに、その情報を小学校の教育活動や授業改善に生かす取組を充実させる必要がある。
- ・保育者と小学校教員との継続的な交流や相互参観を通して、一部の教員だけではない組織的な連携体制を構築していくことが課題である。
- ・幼児期に育まれた資質・能力や学びを踏まえた接続期カリキュラム及び授業づくりの改善を進め、教育の連続性・一貫性をより確かなものにしていく手立てについて考えたい。

10の姿勢

別添資料 1

育まれている面

[illegible]

発表 2

別添資料 2

保育参観シート

【活動内容】

○「どんなまちにしたいかな？」と話し合い、家やお店、道路などのイメージを広げる。

○廃材を組み合わせて作りたいものを製作する。

ねらい	・自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け入れたりしながら町づくり楽しむ。 ・友だちとイメージを共有しながら、協力して活動を進める。 ・廃材を使い工夫して表現する楽しさを味わう。	
視点	①自分の考えを表現する姿 ②友だちと関わる姿 ③試行錯誤しながら取り組む姿 ④主体性に活動を楽しむ姿 ⑤廃材を活用する創造性	
注目した活動と幼児の様子	10 の姿	小学校教育の学びとのつながり
保育教諭の援助について気付かれたこと		
環境構成について気付かれたこと		

◎ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）

1	健康な心と体	6	思考力の芽生え
2	自立心	7	自然との関わり・生命尊重
3	協同性	8	数量や図形、環境や文字などへの関心・感覚
4	道徳性・規範意識の芽生え	9	言葉による伝え合い
5	社会生活との関わり	10	豊かな感性と表現